「別嬪やないか。」
「あれお累の妹やといなアー。」
「お累あんなおもろい顔してよるのに、お玉は別嬪やなア。」
「京へ行つてたんやと、あのお玉が歸つてから與次平の家は甚い人氣やナア。」
「オイ、此の村ばつかしやない、上村も下村からも肩入れに來よるねん。」
「來る奴は皆土産を持て來よる、大根を持て來る、人參を持て來る、牛蒡を持て來る。」
「大豆を持て來る、與次平の家貰ひ物でつかへたアる。」
「棚を釣て並べたアる、與次平『斷り』を書いて張りよつたて。」
「何と書いて。」
「今年は南瓜いや〳〵と。」
「地藏祭やがナア。」
「しかしあないに仰山肩入に行くが、他の村の者にお玉を取られたら此の村の恥や、なんと此の村でお玉を、うん、と云はす者は無いか。」
「見渡したところがそら無いらしい。」
「そら無い。」

「ずつと無い。」
「コラ、あごたの輕平。」
「なんや。」
「われあごたが輕いと思ふて饒舌ない、憚り乍此處に半鐘のチヤン吉さんが居るぞ。」
「フム、そんなら何かチヤン吉、われお玉に物でも云ふて貰ふたんか。」
「もの、アヽもの位云ふて貰ふてこんな騒動が起るかい。」
「フム、そんなら手でもさわつたのか。」
「手をさわつた位で此んな間違ひが出來るかい。」
「そんならどうしたんや。」
「それが聞きたかつたら最う少し前へ寄れ。」
「一體何うした。」
「オイ皆聞いて呉よ、此の間俺が畑で仕事を仕て居ると堤の上を玉公が通りよるので、オイ玉チヤン〳〵と呼ぶと、フツと此方を見よつて、誰かと思つたら半鐘のチヤン吉さんやおへんか、と云ひよるので、玉チヤン何處へ行くのや、と聞いたら、アノ兄さんや姉さんの八ツ茶の茶を持つて行きまんのえ、未だ時刻が早い一寸一服仕て行きなア、と云ふたら、そんなら一服さして貰ほ、と堤を下